

弁解の評価次元と許しの関係

○山川樹
日本大学大学院文学研究科

坂本真士
日本大学文理学部

1. Introduction

山川・坂本(2013, 日本心理学会大会発表)は, 原因帰属理論に基づき一般的な弁解は, 外的統制不能と内的統制可能の2パターンにしか分かれぬ事を示唆した

⇒山川・坂本(2013)では, 評価次元と弁解の効果の関係の検討がなされていない

⇒弁解の系統的分類には帰属理論だけでは不十分という指摘(Weiner, Folkes, Amirkhan, & Verette, 1987)

Purpose

- 弁解の評価次元と弁解の効果 (i.e. 許しの程度) の関係を検討する
- 評価次元として帰属理論の他に, 深刻性と予測可能性 (リスク認識研究; 関根, 2007) を加える

2. Method

Participants

- 都内大学生369名(男性201名, 女性168名)

Procedure

- 場面想定法, 個別記入式質問紙調査
- 講義時間中に配布, 回収

Materials

- 「大学生のA君がグループワークの担当箇所を一人だけやってこなかった場面」を使用した
- A君が課題をやってこなかった際, 様々な内容の弁解(Table 1)をした場面をそれぞれ想定させた
- 各弁解について原因の所在, 統制可能性, 意図性, 安定性, 深刻性, 予測可能性, 許しの7項目の程度を両極型7件法で回答を求めた

Table 1 本研究が使用した弁解内容一覧

NO	弁解内容
1.	身内に不幸があった
2.	急に身内が入院して看病に行ってた
3.	課題をやってる最中に停電になってデータが消えてしまった
4.	突然バイトの代理を頼まれてしまった
5.	他にも課題があつて忙しかった
6.	友達に誘われて遊びに行っていた
7.	自分の力では無理だった
8.	気分が落ち込んでいた
9.	足を踏み外して怪我してしまった
10.	うつ病だと思う
11.	食中毒になってしまった
12.	元々体が弱くて, 体調を崩してしまっていた
13.	遊んでいて忘れてしまった
14.	うっかりデータを消してしまった
15.	進め方が悪かった

3. Result & Discussion

Result

- 評価次元と許しの普遍的関係を検討するため, 弁解の内容をつぶし, 各問ごとに得点を合算した
- クロンバックの α 係数はNo.1とNo.2の弁解を抜いた場合 $\alpha = .73-.83$ であった
- 許し得点を目的変数, その他の6変数を説明変数とした階層的重回帰分析を実施した(Figure 1)

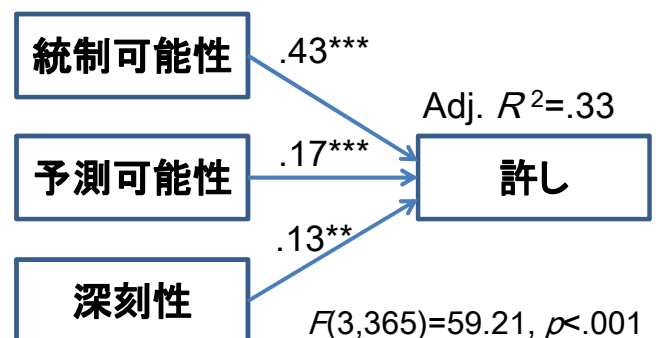


Figure 1 階層的重回帰分析(ステップワイズ法)の結果

Discussion

- 山川・坂本(2013)の結果と合わせて考えると, 弁解の分類及び効果の予測には, 帰属理論の次元においては統制可能性だけで十分な可能性がある。
- 予測可能性と深刻性は, 他の帰属理論の属性よりも有意に弁解の効果の予測を示唆された。